

主体的・対話的で深い学びを育む国語科の授業づくり - 1年生の説明文の授業から「読む」力を育てる

-

著者	小林 雅彦
雑誌名	紀要
号	20(別冊)
ページ	145-159
発行年	2018-03-20
URL	http://doi.org/10.32125/00000014

主体的・対話的で深い学びを育む国語科の授業づくり ー 1年生の説明文の授業から「読む」力を育てるー

小林 雅彦

キーワード：国語科教育、教科教育法、アクティブ・ラーニング、読書活動

1. はじめに

「説明」をキーワードに、2つの例を紹介したい。

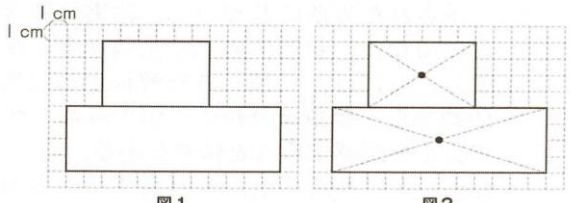
理科の実験でモーターを作ったり、それを使って動く模型を組み立てたりする学習を6年生です。そのとき、実験キットの中に入っている説明書を見て、実験に必要なキットの組立ができない子が多くいる。全体で流れや手順を説明した後、個々に任せていくのであるが、任せた途端「先生、できません。」「わかりません。」という声が出てくる。「説明書に、今話したことが書いてあるから、それを見てやっごらん。」と言っても、「やっぱりできません。」と言ってくる。説明書には、図も書かれているし、組み立ての手順もきちんと示されている。それなのにできないのである。書かれている情報の何が必要なのかを自分で把握し、それを取りだして読むことができていないと感じることが、年を追うごとに多くなってきた。結局、一つ一つの手順を、丁寧に説明し、できていない子には個別の対応をすることになる。

平成27年度に実施された全国・学力学習状況調査の算数B⁵ 図形の観察と根拠の説明（面積の2等分）の問題で、あかねさんが長方形を2等分する直線がどれも一つの点（対角線の交点）を通る

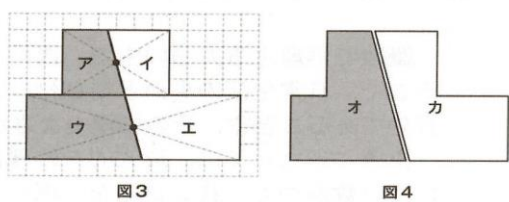
ことに気づいた後、下記のような問題が出された。

○この問題に対する児童の解答例を2つ紹介する。どちらも正解のような気がするが、正答の条件に照らし合わせてみると、説明不足になっている。

(1) 図1のような2つの長方形を組み合わせた図形の面積を2等分します。
まず、図2のように、2つの長方形について対角線が交わる点をそれぞれ見つけます。



次に、図3のように、2つの点を通る直線を引きます。すると、2つの長方形を組み合わせた図形は、図4のように、オとカに分けることができます。



このようにすると、オとカの面積は等しくなります。なぜ、オとカの面積が等しくなるのですか。
そのわけを、言葉や数、アからカまでの記号を使って書きましょう。

・2つの対角線が交わる点は、長方形の中心なので、その中心をつなぎ合わせて、オとカに分けても、オとカの面積は等しい。

・長方形を2つに分けて考えると、小さい長方形は対角線が交わる点で分けられているから、アとイは等しくなる。大きい長方形も、対角線の交わる点で分けられるから、ウとエは等しくなる。だから、オとカは等しい。

この問題に対する正答の条件は次の通りである。

次の①、②、③の全て、または、①、②を書いている。

- ① アとイ、ウとエの面積がそれぞれ等しいことを示す数や言葉
- ② オがアとウ、カがイとエをそれぞれ合わせた図形であることを示す数や言葉
- ③ 同じ面積の図形を合わせていることから、オとカの面積が等しいことを示す数や言葉

(正答例)

・アとイの面積は等しく、ウとエの面積も等しいです。

オは、アとウを合わせた図形で、カは、イとエを合わせた図形です。同じ面積の図形を合わせているので、オとカの面積は等しくなります。

解答例を見てみると、正答の条件や正答例と比べて必要な条件がきちんと記入されていないことがわかる。普段の授業の中で、図を示しながら説明をすれば、多くの子どもたちが理解できそうな解答ではあるが、解答文として読んでみると、正答の条件を満たしておらず説明不足であることがわかる。この調査の全国の正答率は、12.6%である。また、無回答率が20.8%となっている。子どもたちの解答やその後の話を聞くと、「書くことはわかるが、説明の手順がわからない」、「何となくわかるのだけれど、どのように書けば良いのかがわからない」というような反応であった。

報告書(*1)の中の「学習指導に当たって」には、次のように記されている。この問題では、示された考えを基にして根拠となる事柄を過不足なく説明することができるようにする。論理の飛躍を防ぎ聞き手に的確に伝わるようにするためには、根拠となる事柄を過不足なく説明することが大切である。このため、算数の学習では、前提となる考えや理由などの根拠を明らかにして、論理的に考えたり説明したりすることが大切である。

調査の後、子どもたちに解説する機会があった。そこで話したことは、一度に説明しようとするのではなく、「条件を一つ一つ、図に示されている記号を使って短い文で書いていくこと」、「条件の過不足を考えて文のつながりを意識して書くこと」の2点について話した。すると、「あっ、それならぼくにもできそうだ。」「何か、難しく考えていたな。」というつぶやきが聞かれた。

上記の2つの例から言えることは、「資料や文章の中から自分が必要とする事柄をきちんと読み取る。」ことと、「自分が見つけたことや考えたことを図や文などを使って表現する。」ことがきちんと身につけていないということである。これは、各教科等でつけていく力でもあるが、国語科の学習でどのように取組んでいけばよいのだろうか。「資料や文章の中から自分が必要とする事柄をきちんと読み取る。」ために、どのような学びをすればよいのか。「自分が見つけたことや考えたことを図や文などを使って表現する。」ための基礎をどのようにして身につけていけばよいのだろうか。東近江市立布引小学校で校内研究の中で実践された「説明文：いろいろなふね」東京書籍「あたらしい こくご 一(下)」を使った指導案と実践事例、その学びを支える学校の取組をもとに考えてみたい。

2. 国語科の授業の実際

(1) 指導案

第1学年 国語科学習指導案

1. 単元名

のりもののことをしらべよう (東京書籍 1年下「いろいろなふね」)

2. 指導によせて

(1) 児童観 (略)

(2) 教材観

本教材は、特徴的な機能をもった4種類の船を例として取り上げ、役目や構造、装備などについて説明した文章である。4種類の船の例示が、同じ文章構成、同じ文型で説明されていることで、内容を正確にとらえることに適している。また、乗り物という題材は、児童にとって身近なものでもあるため、意欲的に取り組むことのできる題材であると考えられる。

その上で、並行読書を行い、乗り物に関する図鑑などを読み進めていくことで、好きな乗り物を調べ、書かれてある内容を正確に捉え、「のりものカード」に書く活動を設定している。「のりものカード」には、調べた文章をそのまま書き写すのではなく、大事な言葉や文章を見つけて書く力が必要となる。この題材は、書かれていることを正確に読み取る力、大事なことを書き抜く力をつけることに適していると考えられる。

(3) 指導観

学習指導要領 国語 各学年の目標及び内容 [第1学年及び第2学年]には、次のように示されている。

(1) 目標

(3) 書かれている事柄の順序や場面の様子などに気付いたり、想像を広げたりしながら読む能力を身につけさせるとともに、楽しんで読書しようとする態度を育てる。

(2) 内容

指導事項

- ・文章の中の大事な言葉や文を書き抜くこと【読む(1)エ】
- ・互いの話を集中して聞き、話題に沿って話し合うこと【話すこと・聞くこと(1)オ】

校内研究で追究しているテーマは次のとおりである。

伝えたい気持ちを育てる授業づくり
～自分の思い・考えを持ち、学び合い高め合う子の育成～

このテーマを達成するために、1年生のめざす子ども像を次のように設定した。

自分の思いや考えを話し、相手の話を良く聞く子

本単元でつきたい力を次のようにした。

- ・書かれている事柄を正しく読み取り、カードに書く力
- ・友だちと交流する中で、自分が見つけたことを話す力

このことを達成するために、授業では次にあげることを大切にしたいと考えている。

① 主体的な学びをめざす言語活動

本単元の単元を貫く言語活動として、教科書以外の図書から自分の好きな乗り物を調べ、「やく目」「つくり」「できること」の3つの観点を見つけ「のりものカード」に表し、「のりものずかん」を作るという活動を設定した。本単元の最初に、教師が作成した「のりものずかん」を提示し、自分も作りたいという意欲を高める。また、多くの本に触れることで、乗り物についてもっと知りたいという思いが強くなり、それを「のりものカード」に書き込みカードが増えていくことの喜びと意欲が高まっていくと考える。

② 教科書教材と並行読書をつなぐ活動

いきなり多くの図書の中から好きな乗り物について調べさせるのは、この段階では無理があると考え、全体で共通した並行読書教材を学習し、必要となる情報を探し出す手がかりを知ることから始める。

例えば、必要な事柄や大切なことは大きな文字で書かれていること、「つくり」はその乗り物にしか付いていない物や特徴のことであるなど、全体で確認する時間を設定する。

また、児童に提示する本や図鑑について、1年生が読むことができ、「のりものずかん」をつくるという今回の学習に適したものを選び、子どもたちの「できそう」という意欲を支えていきたい。

③ 対話的な学習を促すペア学習とグループ学習

この学習では、場に応じてペア学習やグループ学習を取り入れていく。特に、必要な情報を探し出す活動では、文章の読みに課題を抱える子も、ペアやグループで協力して大事な情報を見つけていく過程を通して、必要な情報を見つけていく力（学ぶ力）がついていく。次第に自分一人で必要な事柄を見つけ、「のりものカード」を作ることができると思う。また、この学習をとおして、これからの話し合い活動の基礎となる力を段階的に育てていきたい。

④ 深い学びにつながる学習の過程や手だて

この学習では、段階を追って「のりものカード」を書くことができるようにしていく。

初めに、教科書を使って「やく目」「つくり」「できること」の見つけ方やカードへの書き方を学習する。

次に、全員で共通の並行読書教材を使って、図鑑の見方を学習する。これをもとに、個人が選んだ図鑑を使って「のりものカード」を書く。教科書教材から図鑑への大きな抵抗を少なくする手だてとして取り入れた。また、「のりものカード」を書く前に「やく目」「つくり」「できること」の3つの項目を色分けし、子どもたちが視覚的に認識できるようにする。色分けでは、線を引いたり、付箋を使ったりして、視覚的にわかりやすくする工夫も取り入れていきたい。

⑤ 教室環境の工夫

「のりものずかん」をつくるということでこの学習を進めていくので、船以外の乗り物にも

興味を持ち、今まで知らなかった乗り物についても興味を持ち触れさせるために、図書館や図書室から乗り物に関する本を借りて、教室に「のりものの本コーナー」を設置する。休み時間など、多くの乗り物に触れる機会を設定することで、「のりものずかん」を作りたいという意欲の向上につなげたい。

また、子どもたちがつくった「のりものカード」を一人ひとりが溜めていく袋を教室に設置し、学習したことが増えていく喜びを味あわせたい。

⑥ 学校図書館司書、市立図書館との連携

学校図書館司書さんから、乗り物に関する読み聞かせをしてもらい、図鑑以外の乗り物に関する物語や情報に触れ、「もっと知りたい」「もっと調べたい」という意欲をもたせていきたい。また、学校図書館にない本を、市立図書館から貸し出してもらい、より多くの本に触れることができるようにしていきたい。

3. 単元目標

- ・書かれている内容から、「やく目」「つくり」「できること」を見つけて、「のりものカード」に書くことができる。
- ・友だちと交流する中で、自分の見つけたことを話すことができる。

4. 評価規準

《関心・意欲・態度》

- ・「のりものずかん」を作るために、「のりものカード」をたくさん書きためようとしている。

《話すこと・聞くこと》

- ・互いの話を集中して聞き、話題に沿って話し合っている。

《読むこと》

- ・乗り物の「やく目」「つくり」「できること」を表す言葉や文を見つけながら読んでいる。
- ・好きな乗り物について調べるために、乗り物について書かれた本や文章を選んで読んでいる。

5. 指導計画（全13時間 本時7時間目）

次	時	学習内容	手だてと支援	評価
第一次 (1時間)	1	<ul style="list-style-type: none"> ・学習の見通しを立てる。 ・船や他の乗り物について知っていることを話し合う。 ・図書室にある乗り物関連の本を見て、多くの乗り物を知る。 	<ul style="list-style-type: none"> ・図書室にある乗り物に関連する本を紹介したり、「のりものクイズ」を出題したりして乗り物に対して興味を持たせる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・乗り物について興味・関心をもって、学習に取り組もうとしている。 <p>関心</p>
	2	<ul style="list-style-type: none"> ・教科書を読んで、内容の全体をつかむ。 	<ul style="list-style-type: none"> ・教科書にでてくる船の名前を、写真を提示しながら確 	<ul style="list-style-type: none"> ・教科書の文を読んで、登場する船に

	<ul style="list-style-type: none"> 全文を音読する。 教科書には、どんな船が出ているのか確かめる。 「のりものカード」に書く事柄を確認する。 	<p>かめていく。</p> <ul style="list-style-type: none"> 「のりものカード」に書く事柄を説明する。 	<p>興味をもっている。関心</p>
3	<ul style="list-style-type: none"> 「きやくせん」の「のりものカード」をつくる。 「やく目」「つくり」「できること」の3つを見つけ、カードに書く。 乗り物に関する本を並行読書で読み始める。 	<ul style="list-style-type: none"> 教科書の拡大を掲示し、3つの事柄を全体で確認する。 「やく目」「つくり」「できること」の3つを色分けして示す。 乗り物に関する本の並行読書をさせる。 	<ul style="list-style-type: none"> 3つの事柄を表す言葉や文章を見つけカードに書くことができる。読む
4	<ul style="list-style-type: none"> 「フェリーボート」の「のりものカード」をつくる。 「やく目」「つくり」「できること」の3つを見つけ、カードに書く。 乗り物に関する本を並行読書で読み続ける。 	<ul style="list-style-type: none"> 3つの事柄を見つけ、色分けをして線を引かせる。 乗り物に関する本の並行読書をさせる。 	<ul style="list-style-type: none"> 3つの事柄を表す言葉や文章を見つけカードに書くことができる。読む
5	<ul style="list-style-type: none"> 「ぎょせん」の「のりものカード」をつくる。 「やく目」「つくり」「できること」の3つを見つけ、カードに書く。 乗り物に関する本を並行読書で読み続ける。 	<ul style="list-style-type: none"> 3つの事柄を自分で見つけ、付箋で貼れるようにするためにペアで考える時間を設定する。 乗り物に関する本の並行読書をさせる。 	<ul style="list-style-type: none"> 3つの事柄を表す言葉や文章を見つけカードに書くことができる。読む
6	<ul style="list-style-type: none"> 「しょうぼうてい」の「のりものカード」をつくる。 「やく目」「つくり」「できること」の3つを見つけ、カードに書く。 乗り物に関する本を並行読書で読み続ける。 	<ul style="list-style-type: none"> 「のりものカード」を自分で書くようにさせる。 必要に応じて個別に支援をする。 乗り物に関する本の並行読書をさせる。 	<ul style="list-style-type: none"> 3つの事柄を表す言葉や文章を見つけカードに書くことができる。読む

第 三 次 (7 時 間)	7	<ul style="list-style-type: none"> ・図鑑の見方を知る。 ・「ごみしゅうしゅう車」を取り上げ、教科書と同じように「やく目」「つくり」「できること」の3つを見つける。 	<ul style="list-style-type: none"> ・「やく目」「つくり」「できること」がわかりやすく、カードに書きやすいものを選んで提示する。 ・同じ資料をもとに、見つけたことを発表する。 ・拡大した教材を提示し、付箋を使い、視覚的にわかりやすいようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・資料から3つの事柄を見つけることができる。読む
	8	<ul style="list-style-type: none"> ・前時に調べたことを「のりものカード」に書く。 ・「はしご車」を取り上げ、教科書の乗り物と同じように「やく目」「つくり」「できること」の3つを見つけ、カードに書く。 	<ul style="list-style-type: none"> ・前時よりも「やく目」「つくり」「できること」が絞りにくいものを提示する。 ・資料から3つの事柄を見つけたときのポイントを全体で確認する。 ・拡大した教材を掲示し、見つけた事柄が書かれている場所を確認しやすくする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・資料から3つの事柄を見つけ、カードに書くことができる。読む
	9	<ul style="list-style-type: none"> ・のりものに関連する本を読み、自分の「のりものずかん」に載せたいものを見つける。 	<ul style="list-style-type: none"> ・「のりものずかん」にたくさんの「のりものカード」を貯めていきたいという思いを持たせる。 ・乗り物についてたくさんの発見ができるように支援していく。 	<ul style="list-style-type: none"> ・わたしの「のりものずかん」を完成させたいという思いをもつ。意欲
	10 11 12	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の調べたいのりもので「のりものカード」を書き「のりものずかん」を作っていく。 	<ul style="list-style-type: none"> ・個人で進めたり、グループで協力したりして、「のりものカード」を作らせる。 ・読み取りが難しい児童は、一緒に教材を読んだり、書くことを確かめたりして支援していく。 	<ul style="list-style-type: none"> ・資料から3つの事柄を見つけ、カードに書くことができる。読む
	13	<ul style="list-style-type: none"> ・作った「のりものずかん」 	<ul style="list-style-type: none"> ・「のりものずかん」を交換 	<ul style="list-style-type: none"> ・友だちの「のりも

	を読み合い、良かったところや気付いたことを話し合う。	させ、読み合って感想を交流させる。	のずかん」を読み感想を伝えることができる。 話す
--	----------------------------	-------------------	---------------------------------

6. 本時の目標

- ・ごみしゅうしゅう車の図鑑から、しゅうしゅう車の「やく目」「つくり」「できること」を見つけることができる。
- ・自分が見つけたことを友だちに話し、友だちの考えを聞くことができる。

7. 本時の展開

学習活動	手だて・支援	評価
1. 前時までの振り返りと本時のめあてを確認する。 ・今日のめあてを知る。 ・「やく目」「つくり」「できること」が、どのようなことなのか確認する。	・「のりものずかん」のページを増やすことに向けての意欲づけをする。 ・見つける事柄を意識させる。	
本時のめあて：ずかんから「やく目」「つくり」「できること」を見つけよう		
2. 「ごみしゅうしゅう車」の教材を読む。 ・自分で読んでみる。 ・難しい言葉やわかりにくい言葉を確認める。 ・読んで気づいたことを発表する。	・教科書と違って、必要な事柄を探して選ばなければならないことに気づかせる。 ・わかりにくい言葉は全体場で確認する。 ・拡大した教材文を黒板に掲示する。	・資料から、3つの事柄を見つけている。
3. 教材文から「やく目」「つくり」「できること」を見つける ・見つけた3つの事柄に付箋を貼る。 ・付箋を貼ったところをペアで交流する。	・付箋のルールを確認する。 「やく目」：青 「つくり」：黄 「できること」：緑 ・話し合いの仕方を確認する。 ①付箋を貼ったところを友だちと見せ合う。 ②付箋を貼った理由を言う。 ③友だちの理由を聞いて変えても、付け加えても良い。	・ペアで自分の考えを話したり聞いたりしている。
4. 付箋を拡大資料に貼り、3つの	・「やく目」「つくり」「できること」	

<p>事柄を確認する。</p> <p>5. 本時を振り返り、次時の見通しを持つ</p>	<p>の順番に全体で確認していく。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 凶鑑のマークや言葉に着目させて、確認していく。 ・ 次時に今日見つけたことをもとに「ずかんづくり」をすることを伝える。 ・ 3つの事柄が、マークやヒントになる言葉に気をつければ見つけられることに気づかせ、他の資料でも試してみたいという意欲につなげていく。 	
---	---	--

<p>⑧</p> <p>・ともだちと「のりものカード」をよみあって、いいところを見つけよう。</p>	<p>⑦</p> <p>・「のりものカード」をまとめて「のりものずかん」をくころう</p>	<p>⑥</p> <p>・きめたのりもの本を見ながら、「のりものカード」をかこう</p>	<p>⑤</p> <p>・「いいところ見つけカード」を見て、どんなのりものがあつたかはっぴょうしよう。</p>	<p>④</p> <p>・ずかんを見て、はたらくのりものカードをかこう。(全体で)</p>	<p>③</p> <p>・「いろいろなふね」をよんで、わかったことはたらくのりものカードにかこう。</p> <p>・ずかんを見て、はたらくのりものいいところを見つけよう。</p>	<p>②</p> <p>・「いろいろなふね」をよんで、はたらくふねについてしよう。</p>	<p>①</p> <p>・このべんきょうのめあてをしよう。</p>	<p>めあて</p> <p>いろいろなふね</p> <p>かいてあることを正しくよんで、よみとつたことをカードにまとめて「ずかん」を作ろう。</p>
--	---	--	---	---	---	---	-----------------------------------	--

(2) 授業を振り返って

① つけたい力と子どもの実態に即した単元を貫く言語活動を設定する。

指導計画を見ると、この学習は単元を貫く言語活動を基に構成されている。

単元を貫く言語活動とは、当該単元で付けたい国語の能力を確実に子供たちに身に付けるために、子供たちにとっての課題解決の過程となるよう、言語活動を、単元全体を通して一貫したものである。(*2)

授業を導入から結末まで、教師がしっかり見通しをもって取り組むことで、どの段階でどこまでの力をつければよいのか、子どもたちにつけたい力と実態に即した授業展開をすることができた。また、子どもたちの反応を見ながら、臨機応変に対応することもできていた。子どもたちにも前ページの表のように学習の流れを最初に知らせて教室に掲示しておいた。このことにより、めあてがはっきりし、見通しを持たせることができた。このような表を利用して、学年によっては、自己評価の欄を設け、学びの各段階で自分の学びがどうだったのか、次への学びにどのようにつなげていくのかを記入させている。

この学習過程と1年生の子どもの学びを見てみると、学びの姿に無理がないことがわかった。

- ①教科書の文をもとに、必要なことを読み取る力をつける。
- ②図鑑に書いてあることから、前の学習を生かして必要なことを読み取る力をつける
- ③図鑑を読んで、「のりものカード」にまとめる。
- ④毎時間ごとに書きためた「のりものカード」をまとめて、「のりものずかん」を仕上げる。
- ⑤できた「のりものずかん」を友だちに読んでもらう。

という一連の流れが、指導者も子どもも共通に認識して授業に取り組むことができた。また、最後に「友だちに読んでもらう」という目的意識もはっきりしていたので、子どもたちの活動も勢いづいた。「のりものカード」カードを溜めていくことは、「できた」が目に見えてわかるので、1年生の子どもの発達に応じた活動であった。

②教科書教材と並行読書教材をつなぐ工夫

教科書教材と並行読書の図鑑をつなぐ工夫をどのようにしていけばよいのか、考えてみたい。この授業では、教科書教材からすぐに個人が図鑑を読んで「のりものカード」を作るのではなく、全体で共通した並行読書教材を学習していった。そのことで、子どもたちは図鑑の中から必要な情報を読み取るための手がかりを学ぶことができた。

授業の様子を見てみたい。

T：昨日まで教科書で4つの乗り物について勉強しましたね。でも、もう教科書には乗り物載っていないね。次は、こういう本から「のりものカード」を作ってもらいます。（図鑑を提示する。）でも、いきなりカード作れる？

C：難しい。

C：できるかも？

T：まずは、みんなでやっていきたいと思います。今日のめあてはこれです。

本時のめあて：ずかんから「やく目」「つくり」「できること」を見つけよう

この3つがわかれば、カードはできそうですね。

T：「やく目」ってどういうことだったかな。

C：仕事

C：すること

T：では「つくり」は？

C：乗り物についているもの。

C：その乗り物にしかないもの。

T：そうだね。では、「できること」は？

C：「つくり」があることでできること。

T：乗り物には、「やく目」があって、その乗り物にしか付いていないものがある。その「つくり」があるから「できること」だったね。

このように、今日の学習の「めあて」を確認しながら、「何をしていけばよいのか」学習に向かう姿勢を子どもたちと一緒に作っていくのである。この後、「ごみしゅうしゅう車」の資料を渡し、読ませていく。個々に読ませた後、わからない言葉がなかったか尋ね、教師が範読する。教科書と違って順に書かれていないので、どこを読むのかを確かめながら丁寧に読んでいく。

T：教科書と違う所に気付いたかな？

C：絵は大きい

C：字も大きいのと小さいのがある。

C：▲のマークがある。

など、教科書との違いを発表させることで、資料に対する興味・関心をもたせ、抵抗感がないようにしていく。

T：教科書では「やく目」「つくり」「できること」で色分けしていましたね。それで、今日は、みんなにセットを作ってきました。（色のついた付箋のセットを提示する。）

C：わあ、3枚ある！

T：今から時間を取ります。「やく目」だと思うところに青、「つくり」は黄、「できること」は緑を貼ってください。

C：全部使うの？

T：使わないといけなところだけに使おうか。ここだと思うところに、貼ってくれたらいいよ。

T：他に聞いておきたいことはないですか。

と尋ね、活動を子どもたちに任せていく。子どもたちは、資料をもう一度読み直し、ここだと思うところに、付箋を貼っていく。やることがわかって、自信をもって一生懸命に取り組んでいる。

教科書教材で学んだ学習方法（色を使って線を引く、事柄ごとに色の付箋を使う）を使って、図鑑を読んでいくことは、子どもたちが今後の学習で自分が図鑑から必要な情報を得るための学び方を学習したことになる。

多くの子どもたちが、付箋を貼り終えたのをみとったとき、

T：みんなしっかり付箋が貼れているね。それでは、これからペアで話し合う時間を取ります。それでは、話し合いの仕方を確かめるよ。

と、指導案にあるように手順を確認していく。

T：1番目。付箋を貼ったところを友だちと見せ合いっこしてください。もしかしたら、同じかもしれないし、違うかもしれないね。2番目。なぜ付箋を貼ったのか、理由を言ってください。

そして、友だちの理由を聞いて、付箋を貼るところを変えても、付け加えてもいいよ。

と指示をし、ペアでの話し合い活動にはいる。自分でしっかりと付箋を貼っているので「一緒だね。」

「あっ、ぼくも貼っておこう。」



「これもつくりと違う？」

など、しっかりと話し合いをしている。話し合いができたことを確認し、黒板の資料にそれぞれの付箋を貼りに来させる。みんなが貼り終えた後

T：それでは、順番に確かめていきます。

と、全体で「やく目」「つくり」「できること」を確認していく。付箋に色がついているので、どこに何が貼られているのか、視覚的によくわかる。

T：まずは青。「やく目」だね。どうしてここに貼ったの？

C：「しごと」って書いてある。

T：そうだね。▲も言ってくれたよね。ここでいい。

C：はい

T：次は、黄色の「つくり」。バラバラだね。どうしよう？どこかにヒントないかな？

C：ぼく、わかる。「ついています。」って書いてある。

C：それと△マーク。

T：これも、実は同じだね。

T：他に貼ってあるのは、「つくり」じゃないの？

C：それも、あってる。

C：どんなものがついているかだよ。

T：助手席のドアも？

C：助手席はこの車だけではないので、違う。

T：ごみをつぶして小さくするのは？

C：この車だけ！

T：それでは、「できること」は？ごみを押しつぶして小さくする機会が就いているから、「できること」は？

C：ごみを押しつぶす。

T：ここも「・・・運ぶことができます。」と書かれているね。だから、「できること」だね。

と、言葉や記号を手がかりに3つの事柄に迫っている。視覚で確認するだけでなく、どこに着目すると良いのかを確かめながら、見方、考え方を指導していくことが大切である。

この授業では

- ①自分で考える。(主体的な学び)
- ②友だちと確認し合う。(対話的な学び)
- ③全体で確認して、自分の考えを見直す。(深い学び)

というステップが、子どもたちの学びを確かなものになっている。

③必然性のある話し合い活動

次の段階では、教師が提示したいくつかの教材の中から自分の調べたいものを選び、「のりものカード」に表す活動に入っていく。同じのりものを選んだ子どもたちでグループができる。学習の仕方がわかっているので、子ども同士が同じ土俵に立ち、互いに教え合ったり、相談したりすることができる。「線を引いたところが同じだね。」「ここも、つくりではないのかな。」など、必

要な事柄を見つけ出すポイントや目の付け所など、一人で学習していくための図鑑の見方が、話し合いの中で自然と身についてくるのである。

④「書かれている事柄を正しく読み取り、カードに書く力」をつける

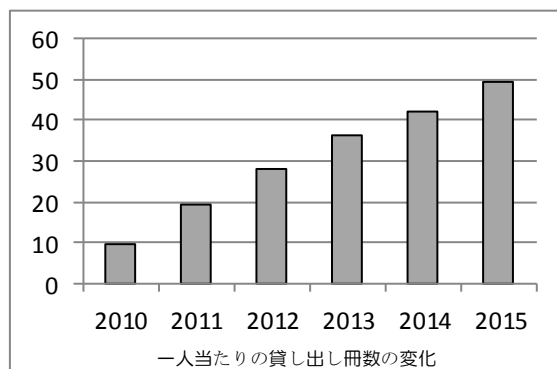
この学習では、①教科書教材を読む → ②全体で同じ図鑑を読む → ③グループで同じ図鑑を読む → ④一人で読む というステップを踏んでいる。同じパターンを繰り返すことで、図鑑から必要な情報を見つけてくることに慣れてくるのである。「何を」「どのようにするのか」という方法を身につけることが、学びの力をつけていく。段階を踏んで学習することで学び方を身につけ、自力で解決できる力になっていくのである。

3. 授業を支える学校の取組

授業をする上で、学級や学校の環境も大きな要因となる。教科書を読むだけでなく、図鑑や様々な本に触れ、並行読書の取組ができることは、日々の活動が重要になってくる。学校での取組についても触れておきたい。

(1) 学校図書館司書との連携

東江市では、7年前から週2回他校との兼務で学校図書館司書が配置されるようになり、本の整理や貸し出し、図書室の使い方や本の紹介などの快適な図書室経営に取組んでいる。指導案(3)指導観の「⑥学校図書館司書、市立図書館との連携」にも書いたように、読み聞かせや本や資料の相談など、授業に対してのフォローをしてもらっている。図書室の本がきれいに整理され、工夫を凝らした紹介もあって、一人当たりの貸し出し冊数も右のグラフのように増えてきた。また、図書委員会の活動も活発になり、図書委員会による朝の読み聞かせや、図書室のキャラクター「ブックマン」による全校集会での活動アピールなど、全校が読書に親しむことができるように司書の協力を得ながら、取組みを進めてきた。また、図書室や4年生以上の各クラスに新聞を置くことにより、全国学力・学習状況調査(平成28年度)では、ほぼ毎日読む子が17.0%(全国8.9%)と高い値を示している。



(2) 朝読書の取組

登校して朝の会を始める前の10分間、毎日「朝読書」の時間としている。一日の学習を読書で始めることで、学級全体が落ち着き、子どもたちが学習に向かう姿勢を取ることができるようになった。ほとんどの学級で読む本を準備し、チャイムが鳴る前から読書をし始める子どもたちが増えてきている。また、教師も一緒に読書をすることによって、より落ち着いたクラス作りができています。朝読書に取組むことで、教職員や保護者の読書に対する意識が変わってきた。教職員は、基礎・基本の学力の基になるとい



先生も一緒に朝読書

う意識をもつようになり、保護者は、ノーテレビ・ノーゲームの取組みを進める中で親子読書の取組みへと広がっていった。

また、教師による月一回の読み聞かせや学校図書司書と連携したボランティアによる読み聞かせも実施した。子どもたちは、真剣に読み聞かせを聞き、本のおもしろさを実感しているのが、教師の側にも伝わってきた。教師自身も、ボランティアさんの読み聞かせを楽しみにし、自分の読み方を見直すことにもつながっている。

(3) 本の楽しさを知る

子どもたちに「読書の時間」や「読み聞かせ」などの機会を設けても、本がおもしろいと実感できなければ、読む活動につながっていかない。そこで、物語をつくる側からのお話を聞いて、本を好きになる取組みも行った。杉山 亮さんに来ていただき、つくるときの苦労や楽しいお話をしていただいた。多くの児童がファンになり、中には全ての作品を読破したという子もいた。また、PTAと協力して、長谷川 義史さんにも来ていただき、親子でお話を聞く会を設けた。ご本人による読み聞かせや描画、ウクレレの演奏など、子どもたちが本を好きになる企画がいっぱいあり、とても貴重な時間となった。

また、「絵本のひろば」をボランティアの方に開催していただいた。部屋いっぱいに絵本を並べて読み聞かせや好きな絵本を好きな人と読む体験である。図書室と違って、全ての本の表紙がわかるように面陳列で手作りの書架に並んでいる。普段、中々目にしない絵本もたくさんあり、休み時間にも「絵本のひろば」の教室に子どもたちがあふれていた。

(4) 詩の暗唱

7月から3月まで、月ごとに暗唱するテーマを決め、覚えたら校長室で暗唱する活動である。全校が同じものを覚える月もあれば、低学年、中学年、高学年と違うものを覚える月もある。「詩の暗唱」と言っているが、「詩」だけではなくことわざや十二支、七草など、多様な言語文化に触れるようにした。高学年であれば、「枕草子」や「平家物語」などの古典、「春望」などの漢詩も取り入れた。掲示板にその月の「詩」を貼っておいたので、自分の学年だけでなく他の学年のものも声に出して友だちと読み合う姿も見られた。

4. 考察

「子どもたちが、教科書や本に書いている内容をきちんと理解できなくなっている。」という話を研究会などで聞くようになった。字面では読めていても、内容を尋ねると、答えられなかったり、違う回答をする子がいたりして、気になっていた。

また、算数の文章問題でも、数値が必要以外のものがある問題を提示したとき、全てを使って解いてみたり、初めの数値だけを使って解答したりと、必要なものをきちんと選択するという力がついていないことを感じるがあった。解き方を教えれば理解できるが、パターンが変わってしまうと同じような間違いをしてしまう子がいる。どうすれば「資料や文章の中から自分が必要とする事柄をきちんと読み取る」力がつくのか悩んでいた。

今回の1年生の授業を通して、「資料や文章の中から自分が必要とする事柄をきちんと読み取る」こ

と「自分が見つけたことや考えたことを図や文などを使って表現する」ために身につけておくべき学びが、はっきりしてきた。

今までも教科書教材を学習した後、「〇〇カード」作りに取組んだことがある。今回のように細やかなステップを踏むことなく、すぐに個人に任せてしまって、「どうしたらいいの?」「先生、助けて。」というつぶやきが教室中にあふれ、個別対応に手が回らない・・・ということがあった。この授業では、「単元を貫く言語活動」を取り入れ、子どもの実態に合わせて学習を進めていくことを大切に取組んだので、一人一人が自分で読み取る力が育ってきた。

まず、教科書をもとにどの言葉を手がかりに、必要な事柄を見つけていくかを学ぶ。教科書の文章は、よく構成されているので、手がかりも見つけやすく、カードに表すこともすぐにわかる。カードが増えていく楽しさも味わうことができる。

そこから、もっとカードを増やしていこうとすれば、一般的な文章を読む必要性がでてくる。並行読書のよさは、「次はあの車をしてみたい。」という思いをもって、教科書の学びをすることである。ただ、すぐにその学びが活かせるかという、そこにいくまでには段階を踏んでいく必要がある。子どもたちが主体的に学び続けるためには、「できた」が積み重なっていくことが大切である。高学年であれば、少しの抵抗があったほうが学びに勢いがつくこともあるが、1年生の特性では目に見える「できた」が続く方がよい。実践の中で述べたように、今までの学びを使って一般化できるものから取組んでいくことが大切である。

また、自分が「できた」ことを友だちと共有することで、学びの自信につながっていく。自分とは違った考えに気づくこともできる。指導者としては、「いつ」「どの場面で」「何のために」話し合いを行っていくのかを考えていかなければならない。そこがうまくできると、1年生は1年生なりに課題からそれずに話し合うことができる。また、そこで学びが深まっていくのである。

指導者が、「ことば」にこだわって全体の交流させていくことが、子どもたちの視点をはっきりさせることもわかった。

学校の取組は、子どもたちの学びを支える上で、大切であると考え。ただ、学校の状態を考えると、落ち着いて取組ができないこともある。何もしないのでは、学校は変わっていかない。できることから少しずつでも取組んでいくことで、学びの環境が作られていくと考える。

(*1) 平成27年度全国学力・学習状況調査報告書 小学校算数 P.93

(*2) 「育成すべき資質・能力を踏まえた国語科の授業づくり」 水戸部修治
初等教育資料 平成27年7月号 P.52